

芥川龍之介と今昔物語集

間 田 笑 子

「今昔物語集」は昨年から読み継いできた。物語の始めはいわゆる聖人の話で、彼らの偉業や奇行などを記したものだ。いずれも同じような伝記ばかりならんでいた。当然退屈してくる。

しかし、わずかながらも、仏教についての知識を得られたのは、おもいがけない収穫だったように思う。辛抱強く読み進んで半年が経ち、巻十六にさしかかった頃から、俄然、話がおもしろくなってきた。

これこそ「今昔」の神髄！一話一話が皮肉に満ちて、突拍子もなく、それでいて人間の欲望や性愛などの本質を表している。(やはり、私は平凡な読者らしい。なぜって、こちらの方がずっと楽しいのだ。)

前回のレポートでもふれたが、多くの作家が「今昔」から題材を得て、珠玉のような作品を残している。なかでも芥川龍之介は、十一話も作品を書いている。

* * *

私が芥川龍之介と初めて出会った作品は、「トロッコ」だった。家から遠く離れた知らないところへ来てしまった心細さ、大人の無神経、自分自身への腹立たしさ、やっと家へ帰り着いた時の何とも言えない安堵感、この表現できない気持ちをどこへぶつけたら良いのかわからない。ただただ、大きな声で泣くしかない主人公の気持ちをうまく表しているなど、子供心に自分の気持ちを重ね合わせて読んだものだ。

次に出会ったのは「蜘蛛の糸」だった。中学校一年のときである。「なぜお釈迦様は、人間の弱い心をご存じでいながら、蜘蛛の糸というもろい糸を極楽から垂らされたのか」という疑問が残ったように覚えている。

学生時代の私は、芥川に夢中になった。うまく表現できないが、彼のもっているどこか神経質な、世を拗ねているような、斜めにものごとを見ているような姿勢が、若い私には好ましく思えたのであろう。

しかし、徐々に芥川のそういった作品が重荷になってきた。「鼻」も、「六の宮の姫君」も、「今昔」以外でいえば、「南京の基督」、「舞踏会」などもそうである。人間の善意(こ

のような言葉では言い表されない人間の好ましい性質)を踏みにじってしまうような物語の結末に、消化不良をおこしてしまっていたのかもしれない。

どうして彼は、このような冷徹な眼で人間を見ていたのだろうか。人間の心を、ずっと離れたところで見えていたのだろうか。

そこで、彼がなぜこのような作品を書くようになったのか、彼の生い立ちからみることにした。

* * *

芥川龍之介は明治二十五年三月一日東京都京橋区入船町 8-1 で生まれた。その地は当時外人居留地であったそうである。しかし、彼が入船町で暮らした時期は少ない。だがその意識は残っていたのか、「舞踏会」「開化の良人」などに影響がみられると思う。

また、彼が生まれたのは父母ともに大厄の年であったということである。そのため、当時の慣習にならい、いったん「捨て子」としての形式をふんでいる。このことも彼の生い立ちに大きな影を落としたにちがいない。

さらに不幸なことに、生後一年足らずの内に母が心の病を発病したのである。彼女は龍之介が十一才になるまで生き続け、彼は母の病が徐々に進行していく過程を、目の当たりにすることになる。このことは、病の遺伝を恐れる心をうえつけたに違いない。後に彼の自殺を促す一因となったのではないだろうか。

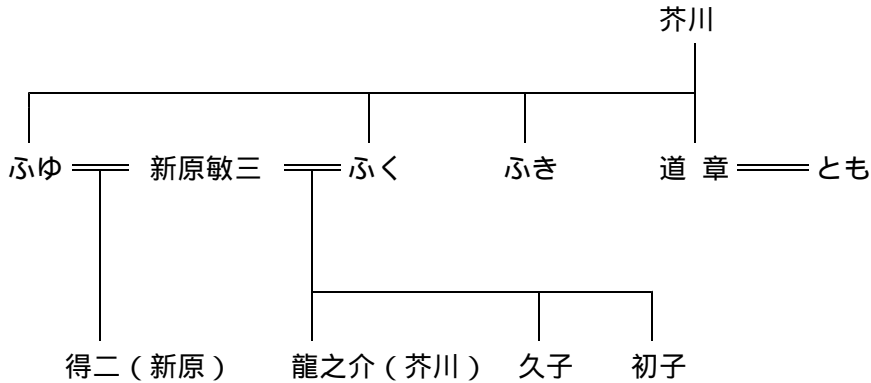
* * *

このような事情があったからだろうか、龍之介は母方の養子に出されている。彼の実父は新原敏三といい、芥川ふくとのあいだに二女一男をもうけている。母が亡くなった後、父親は母の妹、ふゆと結婚し、得二という男子が産まれた。龍之介は母ふくの兄道章と、妻ともの養子となり、伯母ふきとともに大人ばかりの家で暮らすことになった。このことも彼の人格形成に大きな影響を与えていると思う。

芥川家には多少の財産・地所があり、江戸趣味の世界に遊ぶような家だった。幼年期の龍之介は病弱で神経質、礼儀正しい子として育った。学校の成績は優秀で、読書方面も早熟、和漢の本を読みあさったという。中学校に上がっても成績優秀、相変わらず本を読みあさり、漢文の力は抜群であった。イプセンやアナトールフランスなども英訳で読んだということだ。

ここで、芥川家の関係を図にしてみよう。彼がいかに大人ばかりの中で成長したかがよく分かる。

芥川龍之介の家庭関係図



龍之介は学業優等、品行方正というので、芥川家ではきわめて大切に育てられ、世間でいう養子という立場からは、ほど遠い環境におかれていた。しかし、養父母・伯母など数多い目上に仕えなくてはならない生活は、彼にとって気苦労の多い毎日ではなかったろうか。彼の性格がどのように形成されていったのか、その要因と経過をみってみると、次のようになる。

- 1, 形ばかりとはいえ、親から捨てられた。
- 2, 母の病気を目の当たりにしていた。
- 3, 養子の立場上、目上の人に気を遣い、自分を抑えた日々を送るようになる。
- 4, 自己の行動に、反省と自覚を強いられるようになる。
- 5, 孤独を感じやすくなり、外には皮肉や冷たい態度をとるようになる。

高等学校へ無試験で入学した彼は、後に名をあげる数多くの友人と出会うようになる。久米正雄、菊池寛、山本有三、土屋文明、豊島与志雄等々である。

さらに東京帝国大学英文学科へ入学した彼は、雑誌「新思潮」の同人となる。ここで森鷗外や谷崎潤一郎に感化を受け、いくつかの作品を発表している。彼が作家として登場する下地が、この時期出来上がったといえるだろう。

この頃、彼は恋をしていた。しかし、なぜか芥川家はこの縁組に反対し、また養子という遠慮から、結局かれらの恋は実らなかった。龍之介は彼女を忘れられず、彼女の結婚前日に会い、また結婚後も会いたいと望んだようである。彼女を失ったことは彼の性

格づけに大いに影響を与えたにちがいない。「秋」などの作品にこのような関係がみられると思う。

その後、夏目漱石の門下生となった龍之介は、彼の奨励をうけて、作家としてデビューすることになる。「鼻」について、漱石は書簡の中で非常に褒めている。この書簡は高校時代の教科書にもでてきたが、非常に滋味あふれたもので、龍之介は大いに自信を得たことだろう。

大正五年七月、東京帝国大学英文科を二番で卒業した彼は、大学院の学生として引き続き在籍した。

大正七年二月二日、かれは塚本文子と結婚する。彼は文子を気に入り、結婚にも積極的だった。しかし、この結婚は二人にとってはかなりつらいものであった。なぜなら、このときも大勢の家族、姻戚関係に、あれこれ気配りをしなければならぬものだったからである。特に文子は、気を遣う事が多かったらしい。

「三つ子の魂百まで」というが、だいたい龍之介の一生は、家族にも社会にも気を遣う、気骨の折れる毎日だったようだ。このため、彼は心身の調和を失うことが多かったようである。

例えばこんな話がある。ある雑誌社に「近代日本文芸讀本」の編集を依頼された彼は、作家たちに気を遣うあまり、なんと百二・三十人もの作家を選んだという。おまけに本は売れず、「芥川は印税で書齋を建てた」とか、「我々貧乏な作家の作品を集めて、一人で儲けるとはけしからん」などと言う者さえいたそうで、結局、菊池寛などの忠告をきかず、十圓切手かなにかを各作家全員に送ったという。

彼には「勝手にしやがれ」といった気性が無く、世評や世間体ばかりを気にする人間だったのである。

気遣いするあまり、そのたびに薬に頼らなければならない彼は、次第に心身共に衰弱していく。そして、ついに昭和二年七月二十四日服毒自殺してしまうのである。

* * *

ここまで彼の出生から亡くなるまでをたどってみた。

そこで、彼の作品をあらためて読むとき、私は龍之介への見方が少し変わっているのに気づいた。「今昔」のなかの作品でみてみよう。

「往生絵巻」は巻十九の「讃岐国多度郡五位聞法師即出語第十四」を戯曲風に書いた作品である。この中で五位の入道はただひたすらに「阿弥陀仏よや。おおい。おおい。」

と連呼しながら西へ西へと歩き続ける。その姿を、道行く者たちがさまざまな思いで見ている。なぜ、五位が西へ歩くのかは誰も知らない。五位自身も、阿弥陀仏の声を聞くことができると信じて、遮二無二西へ歩く。これまで自身が犯した罪障は、阿弥陀の声を聞けばすべて許されると信じていて、懺悔の一言もない。哀れで愚かしいかぎりである。

「六の宮の姫君」も哀れを誘う物語である。この物語の出典は巻十九の「六宮君夫出家語第五」と巻十五の「造悪業人最後唱念仏往生語第四十七」とされている。この作品も「今昔」をそのまま写したもので、ただ最後の章だけが創作である。六の宮の姫君も、自身の存在感や、阿弥陀仏への帰依の気持ちがない。何かを望んでいるのだが、結局それが何か分からないまま亡くなっていく。ただ地獄と極楽の間をはかなく彷徨っているばかりの哀れな存在である。

この五位といい、姫君といい、共通しているのは、この世に生きる漠然とした不安ではなかつただろうか。それは、龍之介が一生涯持ち続けた不安と一致するように思う。彼が母親の心の病を見て怯えながら育ち、ひとの心を押し量りながら生きていく姿には痛々しいまでのものがある。そうした彼が、このような哀れで、愚かな人間を描くのは当然ではなかつただろうか。なぜなら、五位の入道も六の宮の姫君も龍之介自身なのだから。

* * *

ところで、彼は「今昔」から多くの作品を書いているが、「今昔」の時代背景も、時代考証も、彼にとってはあまり意味がなかったのではなかつただろうか。もっとくだけていえば、文中に現代の言葉やカタカナ語が出てきたとしても、さして驚く事ではないだろう。

彼にとって必要なのは、家に例えれば、そのインテリアだけであって、家の柱組みは彼自身のもっている理念なのだ。彼の理念を「今昔」の説話を借りて語ろうとしたのだと思う。だから五位や姫君の中に彼自身をみつけ、彼自身の悩みや苦しみを書こうとしたのだと思う。

しかし、彼は決して「今昔」の設定を借りただけではない。「今昔」を愛し、「今昔」の人間は我々現代の人間と同じであるといっている。しかも彼の言葉をかりれば、『今昔』は野生の美しさに充ち満ちている。…僕は『今昔』をひろげる度に當時の人々の泣き聲や笑ひ聲の立ち昇るのを感じた。…僕等は時々僕等の夢を遠い昔に求めてある。…」といっているのだ。

小説を書き始めた頃の彼は、生き生きとしていたように思う。「今昔」の世界の中で

のびのびと遊んでいるかのようだ。晩年の彼の作品、「玄鶴山房」や「河童」、「或る阿呆の一生」の暗さと比較してみるとよくわかる。

芥川をはじめとして、多くの作家を虜にした「今昔物語集」は、これからますます佳境に入ろうとしている。

今後の読書会が大いに待たれる私です。

参考文献

「芥川龍之介」	吉田精一	新潮文庫	昭和33年
「日本文学講座3 神話・説話」	磯貝英夫	大修館書店	昭和62年
「芥川龍之介全集」	岩波雄二郎編	岩波書店	昭和53年
「日本古典文学全集・今昔物語集二」	馬淵和夫他	小学館	昭和47年

付記 <芥川龍之介と松尾芭蕉>

昨年から、私はNHKの文化講座で「松尾芭蕉」について学んでいますが、そこで新たに知る芭蕉の人間像には驚かされることばかりです。芭蕉といえば、俳聖で、清貧なイメージをもっていました。先生の言葉をかりれば「やくざな」一生をおくった人物であつたらしいのです。近年芭蕉研究がすすんで、このような評価は定着していますが、芥川龍之介は、すでに大正の時代に芭蕉の斬新さを見抜いていました。

彼は芭蕉を日本の古今の作家中、最も尊敬をしていたのです。「芭蕉雑記」という論文を書いているほどです。彼によれば、「芭蕉は理知の鋭い、悪辣をきわめた風刺家だった。しかも、門人たちより世渡りに長じ、世故人情にも通じ、門弟を操縦し得るだけの機鋒にも富んでいた。その一方彼の住した無常観は弱々しい感情的なものではなく、やぶれかぶれの勇に富んだ不退転の一本道だった。」とあります。彼の評論を読むと、文化講座で学んでいる私には「なるほど、成る程」とうなづけることばかりです。

蛇足ですが、龍之介の一生を調べている中で興味を感じたので、少し紹介してみました。